

県政刷新

元新聞記者 あなたの声を聞かせてください

た な べ

田辺 かずき



民主党

30歳

田辺 一城 (たなべ かずき) プロフィール

1980年 5月16日生 (30歳)
出身 福岡県古賀市

学歴・職歴

1987年 / 暁の星幼稚園 卒園
1993年 / 花鶴小学校 卒業
1996年 / 古賀中学校 卒業
1999年 / 福岡県立福岡高校 卒業
2003年 / 慶應義塾大学法学部法律学科 卒業
毎日新聞社 入社 / 福井支局 配属
2006年 / 大阪本社社会部 配属
橋下徹・大阪府知事、大阪府警などを担当
2010年 / 11月 政治活動に伴い休職
12月 民主党福岡県第4区総支部副代表

家 族 妻と一男一女。妻は同い年の会社員
信 条 「和を以て貴しと為す」「一身独立して一国独立す」
趣 味 映画・演劇・ドラマ鑑賞、読書、音楽
特 技 珠算・暗算(花見そろばん教室OB)
好きなスポーツ ラグビー、水泳、テニス、野球
好きな音楽 サザン・オールスターズ、ドリフ・カム・トゥルー
カラオケ 「母に捧げるバラード」(海援隊)、「青春の影」(チューリップ)



田辺かずき後援会事務所

〒811-3117 福岡県古賀市今の庄1丁目5-36
Tel & Fax 092-692-8510
challenge@tanabe-kazuki.jp

田辺かずきをより詳しく

討議資料

<http://www.tanabe-kazuki.jp>

こんなおかしな話があつていいのか

2003年、福井県の主催イベントに参加した盲導犬ユーザーの視覚障害者の男性が、場内レストランで入店を拒否された。

おりしも、身体障害者補助犬法の完全施行の直後。憤りを覚え、記事化。障害者の立場に立ち、行政の不誠実をあぶりだした。その後、知事が男性に謝罪した。



「規制緩和」の悲劇を追跡

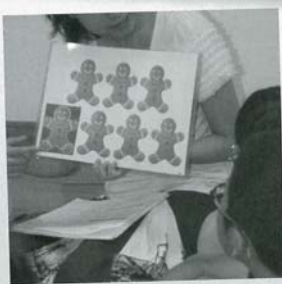
安全を犠牲にする『激安』は必要なのか

2007年、大阪府吹田市で乗客27人が死傷したスニーカーバス事故が発生。バス会社は規制緩和の波に乗って参入した零細業者だった。

激烈な価格競争にさらされ、過酷な運転を強いられる運転手……。

友人の持ち物を見て「欲しいと思う自分が恥ずかしい」といった赤裸々な証言に、貧困が子どもの心理に与える影響の大きさを実感した。

「7人に1人」の子どもが貧困下にあるとされる日本。政治の責任で貧困の実相を明らかにし、救済する必要がある。



子どもの貧困観 初調査

2010年から国際NGO「セーブ・ザ・チルドレン」ジャパンが実施している「子どもの貧困観」聞き取り調査に密着。

政治信条の核心

「底辺の人間やから、しやあないな……」。住まいのテナントを放火されたホームレスの男性が、私につぶやいた一言。彼は決して「底辺の人間」なんかじゃない。弱者にあきらめを生む社会は、健全なのか――。

新聞記者として、「多くの人の思いを政治の現場に伝える」ことを常に意識してきました。福岡・古井をはじめ日本各地で、

世の中の不安と不条理を目の当たりにしました。政治の最大の目的は、あらゆる立場の人の生活の場における「平和と安定だ」と確信します。この実現のため、貢献します。



記者として

—WORKS—

政治に活かすべき「声」がある

毎日新聞の記者として、政治・行政の不誠実や無策に泣く、障害者や高齢者、子どもたちの声を紙面で届けてきた。連日、橋下徹・大阪府知事や政府の地方分権改革を取材し、地方が自立する必要性を痛感した。世界の紛争地や被災地で生きる人々の現実も取り上げた。大阪府警を担当し、日夜、事件を追った。2500本を超える記事を書いた記者生活。それでも、まだ、聞かなければならない「声」がある。政治に活かすべき「声」がある。その「声」を政治に届けたい。



他にも… 地震や豪雨における災害時要援護者支援
パレスチナ・ガザ地区の紛争被害
車いすの工作キット—脳性まひの娘の母の思い
上方文化とまちの復興に挑む店主

あなたの声を政治に活かします

2人の子どもを育てる父親の立場から、**子育て環境を充実させます。**
 共働きやひとり親家庭を支援し、「待機児童」の対策を強化します。
 教育環境を改善し、格差の解消に努めます。
 障害者や高齢者と心が通じ合う地域をつくります。
 記者として、盲導犬や介助犬の利用者の声を聞き、過疎地や災害現場における弱者支援の課題に取り組んできた経験を活かします。

世界の都市間競争に負けない福岡を目指します。
 アジアを強く意識し、国の特区制度の活用による税減免などの実現に努め、企業の新規誘致、中小企業の育成、雇用拡大を図ります。
 地域の農業支援に努めます。
 ブランド力の強化・発信とともに、県内のセーフティネット整備に努め、政権与党の一員として国政にも働きかけます。

議員による政策立案を推進し、みなさんの声を政治に活かします。
 福岡県では近年、議員提案による政策条例の成立は「ゼロ」。
 私たちの声が政治に届いているといえるでしょうか。
 まず、知事と対等な議会になるため、議会基本条例を制定します。
地方でできることは地方で！
 橋下徹・大阪府知事ら各地の首長や地方議会と連携し、政府に「権限の移譲」を強く求めます。

く息づいている。大学や仕事で、東京、大阪に暮らした私は、魅力にあふれた古賀の豊かさをあらためて感じています。
 それぞれの魅力をひとつにつないだら、このまちの暮らしの「彩り」をもっと豊かにできる。このまちは変わる。そう確信します。このまちを、ひとつにしたい。
 夏、3歳の息子と花見の海岸を歩きました。息子はびしょびしょになって、はしゃいでいました。
このまちの子どもたちが、このまちに育ってよかった、いつか帰ってきたい。そう思える古賀をつくりたい。

田辺かずき 30歳 県政刷新！

1 福祉の充実



2 強い経済



3 議会改革

妹とタケノコをとった子ども時代の私



古賀は僕のふるさとです。

タケノコを掘り、ツクシをとり、アジサイの葉に乗るカタツムリをずっと見ていた。田んぼのカエルの鳴き声を聞きながら眠り、タヌキを餌付けした。川のせせらぎを聞きながら、ホタルの光に目を奪われた。ザリガニを釣った。田んぼに自転車ごと突っ込んだ。秋の林で栗を拾った。校庭や公園で、雪だるまをつくった。初日の出を、鹿部山の頂上で待った。

友だちと遊び、祖父母や両親、妹と暮らした、このまちの風景です。
 高校生のとき、古賀は「町」から「市」になりました。人口もどんどん増えました。博多に近い、住むのにもってこいの場所。なのに、「古賀は何もないまち」という声を聞きます。山の緑、海の青、そこに映える夕陽。地域の伝統行事も明る

政治信条の核心

「底辺の人間やから、しゃあないな……」。住まいのテナントを放火されたホームレスの男性が、私につぶやいた一言。彼は決して「底辺の人間」なんかじゃない。弱者にあきらめを生む社会は、健全なのか。

世の中の不安と不条理を目の当たりにしました。政治の最大の目的は、あらゆる立場の人の生活の場における「平和と安定」だと確信します。この実現のため、貢献します。

新聞記者として、「多くの人の思いを政治の現場に伝える」ことを常に意識してきました。福岡・古賀に育ち、東京、大阪、福岡をはじめ日本各地で、



記者として
—WORKS—

政治に活かすべき「声」がある

毎日新聞の記者として、政治・行政の不誠実や無策に泣く、障害者や高齢者、子どもたちの声を紙面で届けてきた。連日、橋下徹・大阪府知事や政府の地方分権改革を取材し、地方が自立する必要性を痛感した。世界の紛争地や被災地で生きる人々の現実も取り上げた。大阪府警を担当し、日夜、事件を追った。2500本を超える記事を書いた記者生活。それでも、まだ、聞かなければならない「声」がある。政治に活かすべき「声」がある。その「声」を政治に届けたい。

